今こそ音楽を！

菅野恵理子（音楽ジャーナリスト）

第1章：社会的観点から

グローバル化する社会、音楽教育にできることは

成長社会から、成熟社会へ

なぜピアノを習うの？音楽が好きだから！
それで十分、それが一番！
でも今、あえてそれを問いかけてみたい。なぜピアノを弾くのか、ピアノを弾くとどう成長するのか、なぜ音楽を学ぶのか、音楽は社会の中でどんな意味を持つのか、社会は何を求めているのか、これからどのように学んでいくべきか・・・？
今、社会が大きく変化している。特に21世紀に入り、IT化やグローバル化によって社会環境は一変した。世界中の情報やモノが溢れている今、我々は消費や所有よりも、自己実現や他人との交流を通して心の充足感を求めるようになった。20世紀社会が追い求めていた経済成長モデルが、精神的な豊かさや幸福感までを保証するものではない、と気づいた結果なのである。
欧州では数年前から、個人の幸福度を測る新しい指標"超GDP"を開発し、これに沿った国家戦略が実施され始めているそうだ。国全体の経済発展よりも個人の幸福度増大を重視し、教育水準・健康度・健康寿命・安全度などを計るもので、「新指標での数字を高めることは、間接的に、迂回路を通じてではあるが、経済を発展させ、成長を続けていくことにもつながっている」（『世界で一番豊かな国日本～成長幻想を打ち壊した国連調査』福島清彦著、p91）。アメリカも非公式ながらこの重要性を認め、独自の指標を開発しているという。
日本でもワーク・ライフ・バランスを追求し、労働時間の効率化や余暇時間の充実化を求める人が増えている（参考「レジャー白書2014」http://activity.jpc-net.jp/detail/srv/activity001414/attached.pdf）。個人の幸福度を高めることが、ひいては社会や国や地球環境にも良い影響を与える。だから、ゆっくり呼吸をし、身の回りを見つめ直し、心のあり方に気を配る、そうした目に見えない価値を大事にする人が増えているのではないだろうか。これは音楽や芸術のあり方にも通じる。

教育には、より人間らしさが求められる

社会の変化によって、教育のグローバル化も進んでいる。といっても、単に英語や外国語の学習時間増ではない。世界中どこでも学べる、という学習環境の変化だけでもない。「学び方」や「評価の方法」が変わるということである。たとえばフランスでは学術資料や問いかけを通して、考察力・分析力を養う（参考「質問を通して学びを深める」http://www.piano.or.jp/report/03edc/art_frnc/2008/07/25_4585.html）。アメリカで提唱された予習先行型の授業（“反転授業”）では、予習で知識を入れておき、授業ではグループワークを行って問題発見力・問題解決力を養う。世界中の学術情報や専門知識がオンラインで瞬時に検索できるようになった今、「知識の大量暗記」よりも「知識をどう活用して問題解決するか」という思考力や考察力が評価対象となるのは、自然な流れである。今日本で、その評価方法が開発され始めている。
このような人間本来の知能を生かす教育はますます重要になるだろう。というのも人口知能の開発が急速に進み、近い将来、一部の職業はロボットに替わるといわれている。そこで今、人間にしかできないことは何か、人間本来の感性・知能・身体をどのように生かせばいいのか、人間らしさとは何か、を問い直す時がきている。
では音楽を学ぶことによって、何が養われるだろうか。
今回は「社会は何を求め、音楽には何ができるのか」という視点で考えてみたい。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

❶表現する力

表現したい本能は赤ちゃんから大人まで

人には感情や意思があり、それを伝えたい本能があり、それが身体や言語を通して表現される。赤ちゃんは手足をバタバタさせながら、お腹すいた！こっち向いて！など本能のままに意思表示する。また子どもは全身と五感を駆使しながら、遊びをとおして人や世界との関わり方を発見していく。さらに成長すると、自分の感情をより多様かつ洗練された方法で表現したい、より多くの人に意思を上手に伝えたい、もっと大きな世界を知りたい、という欲求が出てくる。その様式化されたものが音楽や芸術である。言語表現であれば文学や詩、身体表現であれば楽器演奏、舞踊、絵画などである。

表現することは、人間の成長に欠かせない。20世紀初頭の英小児科医・精神分析医ドナルド・ウィニコットは、個性の発達や民主的な市民精神の形成には、子どもにとっては遊びが、大人にとっては芸術が重要な役割を果たすとした。「人間の生における芸術の役割は、何と言っても感情移入の能力を養い、伸ばしていくことにあると考えたのです」（『経済成長がすべてか？―デモクラシーが人文学を必要とする理由』マーサ・C・ヌスバウム著、小沢自然・小野正嗣訳、2013年）。

しかし、時にそれが欠けてしまうことがある。その一例として著者は19世紀哲学者ジョン・スチュワート・ミルを挙げ、幼少期から言語・歴史・科学の優れた教育を受けていたが、想像力の資質が養われることがなく青年期に憂鬱になり、やがてワーズワースの詩に出会ってから自らの感情を開放し他人にも思いやりの心を持てるようになった、としている。幸せのための「感動」を分析する。

表現様式を知った先にある世界

では、どのように表現の世界に入っていけばいいだろうか。全身を動かして音楽を表現するリトミックは、創造性豊かな遊びから芸術体験への一歩といえそうだ。スイスの音楽家エミール・ジャック・ダルクローズが創案し、心身の調和、音楽性、ソルフェージュ能力などを高めることを目指した音楽教育である。幼児の自律心や集中力の育成、他人との触れ合いなど様々な教育的要素を含むため、「音楽のスキルのみならず、人が人として生きていく上で大事なもの、ヒューマニズムを音楽を通して気づかせることができます」（神原雅之氏談／国立音楽大学副学長・日本ダルクローズ音楽教育学会理事）。

人は成長するにしたがって、より多様で複雑な表現を求めるようになる。ピアノやヴァイオリンなどの楽器はその可能性を大きく広げてくれる。音楽の世界には、人間の喜怒哀楽、信仰、想念、ユーモア、風刺、歴史、土地、民族、舞踊、自然、抽象的概念などあらゆるものが存在し、それが時代様式や楽曲形式にしたがって表現されている。だからこそ、その様式や語法を学ぶことによって作品の真意を知ることができる。特にピアノ曲だけでも数万曲あるが、人の表現力の幅広さ、深さ、凄みははかり知れない。（参考：ピアノ曲事典 http://www.piano.or.jp/enc/）どんな小さな曲でも、それを弾くことによって、きっと今までに経験したことのない未知の世界が広がるだろう。

では、その先に待っている世界はどんなものだろうか。そこには国籍や立場を超え、心をオープンにして共鳴しあう姿がある。こちらに、2012年度リーズ国際ピアノコンクール審査員の一言をご紹介したい。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

「ピアニストがステージに出てくるたびに、私は自分の心をオープンにし、彼らが私の心に語りかけ、自然に涙をもたらしてくれる瞬間を待っているのです。「この人こそ私が待っていたピアニストだ」と。そのピアニストが心から愛している曲を弾き、そこから愛情と高揚感が自然に溢れ出て、我々もそれを愛さずにはいられない、それはまさに魔法の瞬間です」（ロバート・レヴィン氏、ピアニスト・元ハーバード大学音楽学科教授）

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

❷ 文脈を読み解く力、創る力

音楽家は優れた解読者でもある！？

21世紀は答えがない時代と言われる。日々、あまりにも多様な情報に接しているからかもしれない。情報が断片化された”点”のまま、読み流されてしまうことも多い。しかし点と点を追っていくと、一本の”線”が見えてくることがある。その繋がりが見出せると、その”線”が何を意味しているのかを推測できるようになり、自分なりに価値判断ができるようになる。これは文脈を発見するプロセスに似ている。

「文章が全体として一つのメッセージを伝達するためには、一文一文を独立したものと考えず、それぞれが意味的に関連したものとして紡ぎ続ける読み手の努力も不可欠です。意味というものは存在するものではありません、読み手の努力で見出すものなのです。」（石黒圭著『「読む」技術～速読・精読・味読の力をつける』より）

楽曲解釈でも、文章読解と同じことがいえる。音楽は時間芸術であり、そこには時間とともに展開される文脈がある。どんな性格の曲なのか、全体はどんな構造なのか、主題はどう展開するのか、調性はどう変化しているのか、ハーモニーはどう進行しているのか、フレーズはどう連なりどこへ収束するのか、どこが頂点か、そこからどんな文脈が導き出されるのか、音色はどう響かせるか、作曲家が影響を受けた音楽・芸術作品は何か、当時の時代背景や楽器はどうか、等々から、曲の文脈を深く読み解いていくことができる。すると音一つにしても、それが全体の中でどのような意味を持つのかによって、音量、音質、色彩、音の深さ、柔かさや鋭さ、方向性などが変わってくる。

国際コンクールでは、このような曲全体を見る力、それを踏まえて楽想を膨らませる力が大変重視されている。（参考：2010年ショパン国際コンクールhttp://www.piano.or.jp/report/02soc/chopin_con2010/2010/11/20_11716.html）さらに最近はフリープログラムが増えているが、曲の選択と配置によって新しい視点や解釈を提案したり、無名の曲に芸術的価値を見出したり、テーマに沿った選曲で自分なりの文脈を創ることもできる。ピアニストの見識の広さと力量によって、いかようにも世界を広げていける（参考：2013年ヴァン・クライバーン国際コンクールhttp://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2013/05/31_16163.html）。

体系的な学びは他分野にも応用できる

音楽の時代様式や楽曲形式などの体系的な理解が進むと、「この場合はこう考えればいい」といった方法論が身につき、さらに「この楽節はこう展開するだろう」「あの曲にも応用できそうだ」といった推察力や応用力が備わってくる。

これに着目したカリキュラムを実施しているのが、MITマサチューセッツ工科大学である。現在約2,000名が教養科目として音楽科目を選択し、そのうち約200名が音楽に比重を置いた“音楽専修”である。彼らの多くは他学科主専攻だが（機械工学、数学、コンピュータ・サイエンスなど）、歌、楽器演奏、室内楽といったパフォーマンスへの関心が高く、実際に得意であることも多いそうだ。

現在音楽専修生のアドバイザーをしているエミリー・ポロック音楽学科教授は西洋音楽史入門クラス

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

担当で、毎週講堂での講義90分+小グループセッション60分の二本立てで進められる。1学期で3本の小論文(1500〜2400 words)が課され、学期末に試験が行われる。

「オペラであれば舞台演出が時代によってどう変遷してきたのか、交響曲であればその楽曲が時代によってどのように聴取されたのかなど、楽曲の時代背景とその意味を理解してもらうようにしています。また伝統的な音楽様式や楽曲形式といった抽象的な概念も扱います。音楽経験の少ない学生には、音楽がどのように感情・イメージ・事象・記憶を伝えているかを話し、それを彼らなりにストーリーテリングに生かしてもらいます」。

テクストのある歌曲・歌劇や、ストーリー性のある標題音楽を取り上げることが多いそうだが、フーガやソナタ形式等の抽象的な音楽にもテンションやコントラストがあり、それが全体としてストーリーを成していることを理解してもらうという。

ちなみにMIT構内では、廊下を歩いているとどこからともなくピアノやヴァイオリンの音が聴こえてくる。正門前ではアンサンブルグループが集まって演奏を始め、学生たちは耳を傾けながら笑顔で通り過ぎていく、という光景も目にする。一瞬音楽学校かと勘違いするほどであった。

MITに限らず、アメリカの総合大学には音楽学科や音楽学校があり、音楽専攻生だけでなく、他学科生も教養科目として履修することができる。その数なんと、一大学あたり数百〜数千人規模！中には音楽を全く弾いたことも、聴いたこともないという初心者もいる。それでも音楽に興味を持って履修する学生が後を絶たないそうだ。音楽そのものの魅力に加え、こうして他分野に応用できるアプローチも採られている。

日本でも、音楽や芸術で培われる力が注目されてきている。「美術や音楽で培われるものは、その分野だけでなく、そこで培われた物の見方や考え方、処理の様式や問題解決の戦略は、他にも転移や汎化する可能性がある。対象や領域を越えて精神機能が育つということを共通認識とすべき」(国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究」)。

まさに音楽や芸術は、普遍的な教養体系なのである。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)

❸ 本質を問う力

リベラルアーツしての音楽 ～知識を知力に

ハーバード大学構内

音楽の学び方は幅広い。楽譜を読み解いて音にする力だけでなく、音楽を通して思考力や生きるための力を養うこともできる。それは、リベラルアーツ（教養）としての音楽である。

ここで再び、アメリカの大学事例をご紹介したい。アメリカにおける教養とはエリート主義の残滓ではなく、「知識を備えて独立心を保ち、共感の心を持つ市民を形成するのが教養」（『経済成長がすべてか？―デモクラシーが人文学を必要とする理由』マーサ・C・ヌスバウム著、小沢自然・小野正嗣訳、2013年）という考え方が、今でも教養教育の伝統を支えている。そのため音楽学部開講科目の一部は、専攻生のみならず、教養科目として全学生が受講できる。ハーバードやスタンフォード、MITなどでは1,000～2,000人規模という。

ハーバード大学構内にあるコンサートホール

たとえばハーバード大学の教養科目には『初日～5つの世界初演（First Nights: Five Musical Premiers）』という授業がある。モンテヴェルディからストラヴィンスキーまでの5作品を取りあげながら、当時の聴衆がどのように「未知の音楽」に出会い、受けとめたのか、当時の評論記事や書簡などの一次資料をもとに考える。

- モンテヴェルディ「オルフェオ」（1607年・マントヴァ）
- ヘンデル「メサイア」（1742年・ダブリン）
- ベートーヴェン交響曲第9番（1824年・ウィーン）
- ベルリオーズ「幻想交響曲」（1830年・パリ）
- ストラヴィンスキー「春の祭典」（1913年・パリ）

担当のトーマス・ケリー教授は、学生が”傍観者としてではなく、当事者として音楽に関わること”を目指している。そしてこの授業のために毎年新作を委嘱し、その世界初演を聴いて1年間の授業が締めくくられる。つまり自分たちも「未知の音楽」が生まれる瞬間に立ち会うのだ。作曲家の大胆な発想力や繊細な表現力に驚く人もいるだろうし、芸術とは既成概念を打破し、自分の感覚や知覚を大きく広げてくれると実感した人もいただろう。リハーサル見学や作曲家との質疑応答もあり、鑑賞後はリポートが課せられる。

スタンフォード大学構内にはロダンの彫刻がある。

またスタンフォード大学では音楽、映画、絵画、彫刻、文学などあらゆる芸術作品を横断的に見渡しながら、「人はなぜそのように考え、表現したのか」「それが社会にどのような影響を与えたのか」という社会学的・哲学的視点で学ぶ。一例として、2013年に新設された『芸術へのイマージョン』を挙げてみよう。講義だけでなく実践的なプロジェクトも多い授業で、音楽家・アーティスト・学者なども外部講師として登場する（週2回講義＆週2回グループワーク・討論）。このカリキュラムで音楽分野を担当する作曲家のジョナサン・バーガー教授は、次のように語る。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

スタンフォードのような研究大学において、芸術の役割は複合的かつ多面的なものです。音楽学科生にとっては、学際的な繋がりの中で、音楽を含むすべての芸術の学びを深めてくれます。また全学部の学生にとっても、芸術は不可欠で不可避なものだと考えています。芸術は曖昧さを受け入れ、創造的に考え、問いかけ、また挑戦することを教えてくれます。学生自身の嗜好や思考の枠を超えるチャレンジでもあります。

2014年冬学期は「厳粛さと軽妙さ」をテーマに、芸術家がいかにパロディや風刺を通して社会問題を世に訴えてきたかを学んだそうだ。資料はシェイクスピア『マクベス』、ストラヴィンスキー作曲・ニジンスキー振付『春の祭典』、マルセル・デュシャン作『泉』、ショスタコーヴィチ交響曲第7番『レニングラード』、ベンジャミン・ブリテン『戦争レクイエム』、ヴィンセント・ミネリ監督『時計』など。作品の本質を見据えながら、なぜその作品が生まれたのか、なぜその手法を用いたのか、どのような社会・時代背景があったのか、芸術と社会にはお互いどんな影響があったのかを、大局的に考えるのである。

学びがある程度進んだところで、学外へのステディツアーも実施している。サンフランシスコでは、『アゴン』（ストラヴィンスキー作曲、バランシン振付）などのバレエを鑑賞。またLAではパブリック・アート（広場、壁画、貧困街など）や美術館見学、LAフィルコンサート鑑賞、地元コメディアンとの対話、大学役員邸宅でのパーティ、などが行われたそうである。

ツアーのテーマは「芸術がコミュニティのアイデンティティにどう貢献しているか」「芸術活動に際して、周囲の建築物や都市政策はどのように影響しているか」等を検証すること。音楽や芸術作品にはどのようなコンテクストが背後にあるのかを、知識と五感を使いながら読み解くのである。まさしくアクティブ・ラーニングである。

リベラルアーツとしての楽器演奏〜感覚を表現に

知識として学んだことは、アクティブ・ラーニングを通して知力に変えていくことができる（参考：「感から知に変える音楽の聴き方」http://www.piano.or.jp/report/03edc/art_frnc/2008/08/08_4586.html）。その最たる例は、パフォーマンスである。アメリカの大学で開講されている音楽科目には理論と演奏実技があり、アンサンブルグループやオーケストラの多くが単位認定されているさらに楽団所属の学生に対する奨学金授与や、個人レッスンの単位化が進んでいる大学もある。

アイビーリーグの一つ、ペンシルベニア大学でもアンサンブル実技は全学生対象に開講されており、単位取得が可能である（吹奏楽、管弦楽団、バロック&リコーダー室内楽団、室内楽団、合唱団、聖歌隊、ジャズ、アラブ・アンサンブル、サンバ・アンサンブル等。オーディションが課される場合もある）。また楽器の個人レッスンは200人以上が受講しているそうだ。さらに音楽主専攻生には特別プログラムがあり、地元フィラデルフィア管弦楽団奏者などが指導にあたることもある。

ピアノなどの楽器個人レッスンは、2008年秋から単位認定されている。かつては課外活動とみなされていたが、パフォーマンスの比重を増やす方針に変更されたそうだ。ペンシルベニア大学マイケル・ケトナー氏によれば「アメリカ独立宣言起草委員の一人で、大学創立者ベンジャミン・フランクリンは、『学校とは思想を生み出すだけでなく、それを実践する場である』と述べています。音楽も理論だけでなく、実践されるべきということではないでしょうか」。

また全米最大規模のリベラルアーツ・カレッジであるカリフォルニア大学（以下バークレー校）でも、アンサンブル実技のクラスが全学生対象に開講されてい

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

る。こちらは現代音楽即興アンサンブル、ゴスペル合唱、ジャワ・ガムラン、アフリカ系音楽アンサンブル等も含まれ、国際色豊かだ。民族音楽学の教鞭をとるボニー・ウェイド教授は、「楽器を演奏することによって、音楽に深く入り込むことができます。ですから、音楽を通じて自分の国や他の国を知ることにもなります」という。

カリフォルニア大学のバロック・アンサンブル

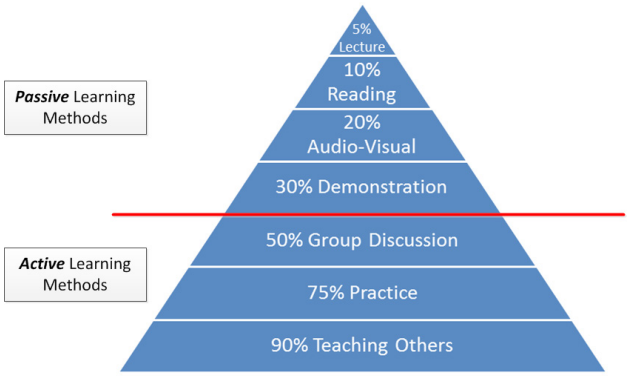
まさにパフォーマンスは身体知であり、それが単位として評価されているのだ。

問いかけ体験して学ぶ、アクティブ・ラーニング

現在日本の教育現場でも、全科目においてアクティブ・ラーニングが模索され始めている。こちらは文部科学省による定義である。

> 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である

実際に学んだことを相手に教えたり、実践したり、討論することによって、学びが内在化・深化する。右図はその「学習定着率」を段階的に示したものである。（数字はあくまで便宜的なものだが、講義の受講や読書が5-10%に対して、グループ・ディスカッションで50%、実習・実践で75%、他者への指導で90%となっている）



"Learning Pyramid, National Training Laboratories ※http://networklessons.com/より引用

音楽や芸術には人間の生き様が現れている。時代によって表現様式が違っても、人間の本質や物事の真理はほとんど変わらないのではないだろうか。たとえば、美しい、愛しいと感じる心、故郷を想う気持ち、喜びや苦難、自然に対する畏敬など、時代を経ても変わらない。過去の作品からそれを学び、自分の身体を使って表してみると、表現にはどのような思いや意図があるのか、表現方法がいかに多様か、などが分かってくる。

なお、今週開催されるラ・フォル・ジュルネでは、“恋、いのち、祈り”の3つの切り口で「パシオン（Passion）」が奏でられる。作曲家や演奏家によって表現が異なるので、聴き比べてみるのも面白いだろう（参考：ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン『熱狂の日』2015　http://www.lfj.jp/lfj_2015　、LFJ丸の内エリアコンサート　http://www.piano.or.jp/concert/news/2015/04/17_19543.html）

過去の智慧を学び、現在にあてはめて考え、未来に生かすこと、それがリベラルアーツ（教養）の意義である。ピアノなどの楽器や歌は、知識を知力に変えるためのアクティブ・ラーニングといってもいいだろう。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

❹ グループワーク（協働）の力

自分の役割を知り、他者とコラボレーションする

社会生活でも音楽でも、一人で全てをこなすだけでなく、他人とともに問題を解決したり、目標を達成する場面がある。そもそも古代から、人は一緒に音楽を奏でたり歌うことで共同体意識を高めてきた。音楽によって他者と繋がること、音楽を他者とともに創ることは、自然な営みである。ソロ曲が多いピアノでも、やはりデュオやアンサンブル経験から得るものは大きい。そこで最近ピアノコンクールでは室内楽を課する場合が増えている。まさに「他者ありき」の課題だ。（参考：ジュニア国際コンクールの今、ヴァン・クライバーン国際コンクールのセミファイナル　http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2013/06/01_16167.html）。

ではどのようなプロセスを経て、アンサンブルが出来上がっていくのだろうか。共演者は、国籍や年齢が異なるだけでなく、テクニック、呼吸、拍感、音質、ディナーミクの幅にも違いがある。頼れるものは楽譜だけ。そこで、まずは正確な読譜が条件となる。

その上で、どのようなチームワークで曲の流れを創り上げていくか。自分の役割を把握し、共演者の楽器特性を理解し、お互いの音色の響きや方向性をよく聴き、全員の楽曲解釈をすり合わせて一つの流れを創る、等々、とても複雑なプロセスなのである。一人一人が、主体性と客観的視点を持つことが望まれる。

さらに、お互いを信頼して個性を生かしあうことができれば理想的だ。国際コンクール

でも特に印象的だったのは、ピアノが全体の流れを自然にリードしつつ、共演相手の潜在能力をも引き出しながら一つの世界観を創っていた演奏である（参考：ヴァン・クライバーン）。他楽器の発音や弓の動きを知った上で、ピアノの打鍵や響かせ方を工夫したり、共演者を尊重しながら一人一人が個性を発揮しやすい流れを作っていた。

ピアニストで室内楽の達人でもあるイタマール・ゴラン氏は、「人によって拍感や色彩、ディナーミク、強さは異なり、それによってエネルギーや音楽への投影の仕方も違います。だから私はいつも、共演者と何か新しいものを創ろうと試みているのです」という。弦楽器奏者も同様だ。「『弦楽四重奏はまるで16本の弦でできた弦楽器で弾いているように聞こえなければならない』と言われますが、私はNO！と言いたい。皆が同じ本を読み、同じことを考えていたら会話は面白くありません。それぞれが確立した個人であることが大事。一人一人がしっかり個性を持っていれば、そこから議論が生まれ、互いの考えを共有することができます」（vn.マーク・ダネル氏／2011年ムジカ・ムンディ音楽祭にて）

AO入試で評価されるグループワーク力とは

アンサンブル能力は音楽だけでなく、学校や実社会でも生かされる。例えば学校ではホームルーム、委員会、部活動など、あらゆる場面において協働作業の機会がある。授業でもグループワークの導入が検討されている（参考：今こそ音楽を！【1】社会が変わるhttp://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2015/04/24_19572.html）。大学入試においてはどうだろうか。現在日本では約半数がAO入試で、今後

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

さらに増えていくとされているが、全州でAO方式を採るアメリカの事例をご紹介したい。書類審査では学業成績表やSAT（大学進学適性試験）点数だけでなく、推薦文、小論文、学校内外での活動状況、パーソナリティまでが精査される。その際に「リーダーシップがあるか」「どのようにクラスでコミュニケーションを取っているか」「問題があった時にどのように解決するか」などが焦点になる。オーケストラやアンサンブルに所属していた場合は「その楽団内でどのようなパートや役割をどうこなしていたか」なども考査の対象となるそうだ。

米在住指揮者の原田慶太楼氏（現在シンシナティ交響楽団、アリゾナ・オペラ団、リッチモンド交響楽団各アソシエイト・コンダクター http://kharada.com/）は、以前フェニックス・ユース・シンフォニー音楽監督を務めていた際、大学進学希望者に推薦状を毎年100枚以上書いていたという。「アドミッション・オフィサーは受験生が高校でどんな活動をしてきたかをチェックします。たとえば学級委員長や生徒会長をしていたか、成績はどのくらいか、クラブ活動では何をしていたか、リーダーシップや集中力があるか、などです。オールラウンドの人間が望まれているので、課外活動を何もせず勉強ばかりという高校生にとって難関大学合格は難しいですね。現在ユース・オーケストラの団員は400人前後いますが、音楽学校や音楽院に進むのは僅かで、アイビーリーグを希望する子が多いです。実際に入学できるのは指揮者からの推薦状を持っている人がほとんどですね」。

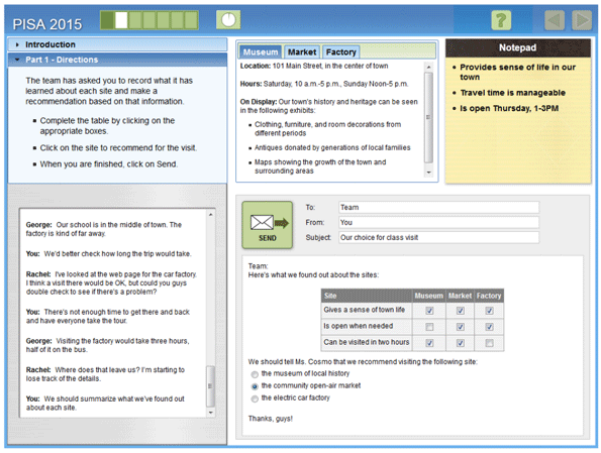
原田氏が推薦状を書いた学生の中で、ハーバード大だけでも7名合格した（2013年当時）。その一人、将来医者を目指すハーバード大学1年生でフルート奏者のジェニファー・チャンさん（Jennifer　Chiang）は小学生の時にユース・オーケストラに入団し、多くを学んだそうだ。

毎週末地域の病院で演奏するボランティアグループMIHNUETでも活動中。こちらはブラックタイ・コンサートの様子

「ユース・オーケストラでは他の人と力を合わせるということを学びました。全員で一つの音楽を創り上げるのが目的ですから、自分の役割を的確にこなすことが求められます。たとえば自分が伴奏の立場であれば、他の奏者や聴衆がメロディをしっかり聴き取れるように音を控えめに出すとか。常に自分の周りの人をよく聴くように努め、そして時には自分の意見を恐れずに伝え、仲間の意見や批判も真剣に受けとめて考える習慣がつきました。音楽をより良いものに高めていくためには率直に意見交換することも必要です。勉強も同じですね。大学の授業ではチームで学術プロジェクトに取り組むことになりますが、良いチームメイトであるほど大きな貢献ができると思います」と語っている。現在はハーバード・ラドクリフ・オーケストラでフルートを担当している。

PISA新指標は アンサンブル力で培われる？

昨今、世界の学習評価基準も変わってきている。OECD経済協力開発機構が15歳児を対象に実施しているPISA学習到達度調査では、2015年度から「協同型問題解決能力」が追加される（その他「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」）。



(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

ここにサンプルテスト例をご紹介しよう（参考：OECD Programme for International Student Assessment 2015）。パート1は「海外からやってくる外国人学生グループに地元を案内してもらいます。クラスメート3名とともに、その案内先を3つの選択肢から選びなさい」というお題。チャット形式で会話を進めていき、「あなた」ならどのように答えるか、最も適当だと思うものを選んでいく。

第1問目では、「何から話し始めようか？」に返答する形で、まず解決すべき課題を明らかにする。続いては、およそ以下のような流れである。（ここでは3つの選択肢をA,B,Cとする）

- 何から話し始めようか？（課題の抽出・明確化）
- “地元”とは何を指すのか？（理解の共有化）
- 決められた行動時間内に行ける場所はどこか？（約束事の確認）
- 脱線した意見が出たので、課題を再確認しよう（チーム役割分担の観察とフィードバック）
- Aについての情報確認→却下、B,Cも検討しよう（チームメンバーとの協働）
- B、Cともに”地元”を感じさせてくれる（理解の共有化）
- Cへの反論に異議あり。BとCをきちんと比較検討しよう（グループワーク促進と複数選択肢の検討）
- Cの場所が遠いが時間内に戻ってこれるのか？（新たな問題発見）
- Cについての情報確認→却下（理解の共有化、問題の内容検討）
- 全会話の要約
- 会話から判明した事、および最終案を担任に報告する（計画の実施と約束の遵守）

パート2では「どの学生がどのグループのガイドにふさわしいか、何を基準にどう選べばよいかを考えよ」、パート3では、「学生の一人が急に帰国しなければならなくなった。誰が何時までに空港までどのように見送りに行くか」を、同じく会話形式で進めていく。

このように段階を追って、前提条件、関わる人数、時間や場所の制約、予想外の展開、新たな課題などが増え、難易度が上がっていく。評価指標としては、「チームメンバーの考え方や能力を把握しているか」「チームメンバーがどの程度理解しているかを確認し、適宜修正できているか」「行動結果を観察し、問題解決の達成度を判断できているか」「チームとして機能しているか」などがある。まさにアンサンブルでも同じことが言えるだろう。

今日本でアンサンブルが着実に広まっている。毎年全国500地区以上、4万人以上が参加するピティナ・ピアノステップでも、アンサンブルは75地区（2014年度）で増加傾向にある。一度でも経験すると、音楽の見方や関わり方が変わるだろう。

また演奏に限らず、運営面でもアンサンブル力が発揮されている。ステーションでは、各地の特色を生かしたステップ運営や地域音楽活動への波及が見られるが、これはまさにピアノ指導者の先生方がもつ協働・協創する力である。これについては後の章で述べたい。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

⑤ 世界とつながる力

若い頃から身につく異文化受容力

世界は周囲との関わりによって築かれていく。家族、友人、学校、音楽教室、街、他の街、他の国・・・、行動範囲が広がるにつれて周りの世界はどんどん広がっていく。そのたびに、自分とは違う価値観や世界観に出会うことになる。では自分と違う世界をどう受け入れ、繋がって行くのか。

音楽は、一瞬にして、遠い国へ思いを馳せたり、心を寄せることができる。ただ聴いたり、弾くだけで。実際、ピアノや音楽を学ぶ人は、異文化に早くから自然に触れることになる。たとえば子供用の小品には、世界中の国々の舞踊や民謡を元にした作品も多い。一例として、2015年度ピティナ・ピアノコンペティション課題曲を見てみよう。A2〜A1級（未就学児〜小学校2年生）では、ドイツ、オーストリア、デンマーク、アメリカ、オランダ、ロシア、ポーランド、スペイン、日本の作品・作曲家など、多様である。

そして旋律、ハーモニー、音色、リズムなどには、その国らしい雰囲気がにじみ出る。「あ、綺麗だな」「楽しそう！」「なんか不思議な感じ」という感覚は、その国や文化に対する興味を抱くきっかけになる。特にA2〜A1級は脳が急速に発達すると言われる7〜8歳にあたり、この時期に多様な音色に触れることは、将来的に多様な価値観の受容へと繋がるだろう。

これは子どもの環境創りにも通じる。心理学者ミハイ・チクセントミハイ氏（元シカゴ大学心理学主任教授）は天才の創造力などについて研究しているが、幼少期の親の関わり方についてこう述べている。「子どもにこの世界の美しさと多様性を気づかせることはとても大事です。将来頭角を現す分野に興味を示すのは、それからでもいいのです」（"Creativity-Flow and the Psychology of Discovery and Invention", Mihaly Csikszentmihalyi, Harper Collins Publishers 1996）

世界の音楽仲間に出会い、関わること

では、音楽があれば世界に飛び出していけるだろうか。「そんなのムリ」「私にはちょっとできないかな・・」と考えて、行動に結びつかないことは誰にでもある。人は身体の限界より、意識の限界を先に感じることがあるもの。しかし恐れや失敗を回避する気持ちより、興味や好奇心が優った時、音楽はその壁をぱっと飛び越えてしまうことがある。

「武術でも音楽でも、すべての人に能力は潜在していて、違いはリミッターを外せるかどうか」（『響きあう脳と身体』茂木健一郎・甲野善紀共著）という説もある。これは普段無意識のうちにかかっている制約がはずれ、限界まで能力が引き出されることを言う。

最近では、積極的に世界中の音楽家と関わる若手も増えてきた。例えば久保山菜摘さん（23）は小学生の頃からピアノ演奏を通じたボランティア活動を続けており、昨年は鍵盤ハーモニカ20台をペルーまで届け、クラシック音楽を聴いたことのない児童相手に演奏や指導を行った（ピティナ・クロスギビング http://www.piano.or.jp/info/crossgiving/peru-keyboard.html）。また阪田知樹さん（21）は欧州渡航のたびに新しい楽曲や音楽家に刺激を受け、2013年ヴァン・クライバーン国際コンクール最年少ファイナリストとなった際には、

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

第一次予選にてリスト『ラ・カンパネラ』の1838年初版を弾き、会場やネットでも話題となった。あまり知られていない曲の面白さや美しさを発見し、今度は自らそれを伝えたい、という意志を感じる。

やはり小さい頃から音楽に触れ、音楽を通して世界を広げてきた人ならではの異文化受容力や世界と関わる力がある。行動に繋げることができた人は、より広い世界の中でまた同志を見つけることができるだろう。

（参考：ジュニア国際コンクールの今　http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2012/06/22_14418.html）

様々な世代と接すること

音楽は身近な異文化・異世代を結びつけることもできる。特に最近は世代間交流が減っていると言われるが、音楽はそれを回復し向上させることができるだろうか。

2004年に実施された高齢者対象の調査研究『シルバー層の世代間交流の実態と意識』（北村安樹子著、第一生命経済研究所、2004年）によれば、回答者の7割以上が子どもとの交流に関心があるが、ふだん子どもと接する機会を持つ人は3～4割程度にとどまるとしている。

子どもとの交流に関心がある理由としては、「子ども世代の考え方や文化を知ることができるから（67.1%）」「子どもとのふれあいは、日々の生活にはりあいや楽しみをもたらすから（51.4%）」「子どもとふれあうと、若々しい気分になるから」（48.1%）と、子どもとのコミュニケーションが生きがいや若々しさの実感に繋がるとしている。これは生きるための大きなモチベーションであろう。

一方、関心がない理由としては「子どもとは活動のペースが合わないと思うから（38.4%）」、「忙しくて時間が合わないから（31.5%）」「興味の対象が違うと思うから（28.8%）」と、初めから世代差を懸念する傾向もみられるが、活動や興味の対象が似通っていればその差は比較的容易に埋まることも想像される。

ではピアノや音楽という同じ趣味や特技を持っていた場合、世代間交流は活性化できるだろうか。様々な世代がステージに立つ場として、ピティナ・ピアノステップを例に挙げてみよう。これまで1歳から100歳までのピアノ学習者数十万人が参加しているが、シニア・シルバー世代の参加も少なくない。そこで、最近一つの動きがあるという。当日のスケジュールを組む際に、以前はほぼ世代別にグループ分けされていたのが、最近は異世代を同じグループに入れているそうだ（全体の6割程度）。それによって子どもが大人の演奏を、また大人が子どもの演奏を聴くことになる。年齢や世代は違っても、同じ表現者・演奏者として共感する時、言葉を交わさなくても心が通じる瞬間がある。中にはコミュニケーション用紙を交わした人もいたかもしれない。

例）鳥栖基山ステップhttp://branch.piano.or.jp/kiyama/column/2014/04/03_007029.html

前掲の調査研究によれば、シニア・シルバー層が接する機会が比較的多い順に、①大学生を含む20～30代（54.0%）②小学生（45.6%）③就学前の子ども（42.6%）④中高生（31.8%）という結果が出ている。ピアノに限って言えば、②④が一番多い。高齢になってもなお若年世代と同じステージに立つ機会があることは、超高齢化社会を活気づける要因になるだろう。また子どもにとっても、自分と同じく健闘する上の世代を見て、勇気づけられたり、未来社会に対して肯定感を持つことができるだろう。

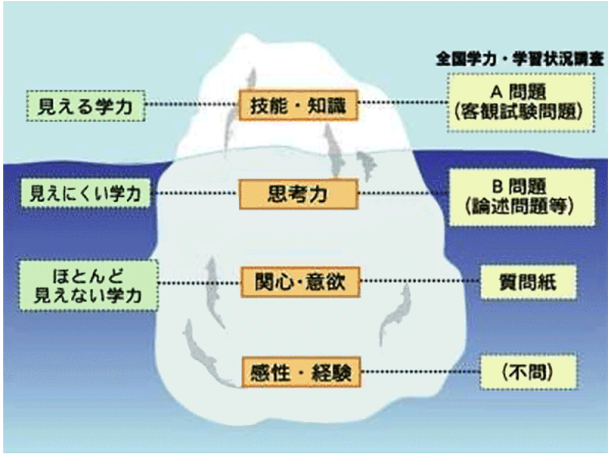
なお世界中のコンサートホールでは、60～70代のベテランと20～30代の若手による異世代共演などはよくみられる。才能ある若手演奏家にとって巨匠との共演は至福の喜びと学びであり、巨匠にとっては若い感性との出会いで新たな霊感を得ることもあるだろう。音楽には、地域も世代も超えて、双方に新しい世界観をもたらす力がある。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

⑥見えにくい力を評価すること

音楽や勉強での見えにくい力とは

本当に大事なものは何か？たとえそれが分かっていても、目に見えないと見過ごされてしまうことがある。今、その目に見えない価値を視覚化して、積極的に評価しようという流れがある。



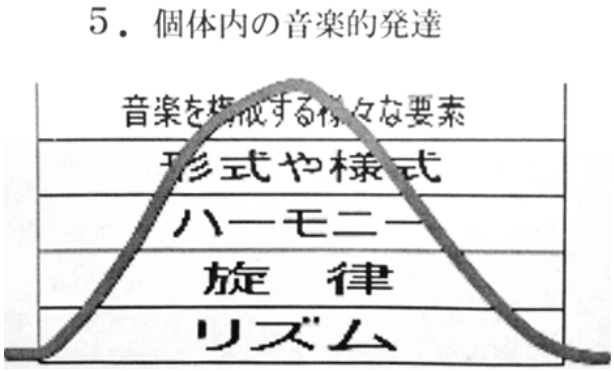
「確かな学力」の氷山モデル（梶田叡一）

上図は「確かな学力の氷山モデル」(梶田叡一、参照元:『〈新しい能力)と学習評価の枠組み』www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2013/01/29/1330122_01.pdf　松下佳代著、京都大学・高等教育研究開発推進センター)である。これは21世紀に必要な“新しい能力”をどう規定し評価するか、という調査の過程で引用されたモデルである。これによれば、「技能や知識」は見える学力、「思考力」は見えにくい学力、さらに「関心・意欲」「感性・経験」は氷山の底にあり、なかなか見えない力とされる。

「技能や知識」はまず物事を覚えることから始まる。暗記できているかどうかで判断できるのは、見えやすい学力である。一方、「思考力」は文脈を理解したり、知識をもとに自分の考えを述べるなど、物事の本質を読み解いて応用する力である。この力があれば、新しい課題に出会った時でも、自ら解決に導くことができるだろう。さらに「感性」は、物事全体のイメージや性質をぱっと把握したり、直感や想像力を生かして新たな視点からその本質をつかむ力にもなる。「思考力」や「感性」を測るのは難しいが、その力量次第で学びの深さが変わってくる。

同じことが音楽にも当てはまる。新しい曲を弾く時に、以前学んだ知識や考え方をどのように生かし、自らの力で読み解くことができるかは、学びの深さと比例する。それが、国際コンクールなどで審査の対象となる(参考：エリザベート王妃国際コンクール「個の力を引き出すシステム」http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2010/05/26_14360.html)。

下図は「個体内の音楽的発達」の図である(「ピアノにつながる！リトミックレッスン大集合」講座・神原雅之氏資料より)。リズム→旋律→ハーモニー→形式や様式→音楽を構成する様々な要素、の順に学びが進んでいくという図式である。これは自然の摂理に適っているだろう。なぜなら、音楽の歴史的変遷とほぼ一致している。



まずリズム、旋律はどちらも人間が原初的にもつ力といえる。リズムや声の調子は人間の内的律動に直結した根源的なものであり、古代ギリシア詩人は韻律と旋律によって詩を語り継いだ。一方、ハーモニーや形式・様式は、より体系的で知的な営みを象徴している。ハルモニア(調和)の概念は古代からあったが、ハーモニー(機能和声)の進行が楽曲の骨格を成すようになったのはバロック時代以降の調性音楽である。さらに時代を経て、今では形式・様式などを体

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

系的に学ぶようになったことで、楽曲全体の構造や時代背景を読み解き、様々な楽曲解釈に応用できるようになった。

楽譜を読むということは、楽曲本来の姿を浮かび上がらせること。だからこそ、部分的な音の美しさや正確さだけではなく、その音がどのような時間的推移や時代的背景の中で生まれたのかを考えることで、より本質に迫ることができる。

この音楽的発達モデルと学力モデルを逆にして重ね合わせてみると、似通っている部分がある。「リズムや旋律」は見える学力、「ハーモニーや形式・様式」は見えにくい学力に相当すると言えるだろうか。音楽においても、後者の力を身につけたとき、学びが深まった状態だと言えるだろう。さらに知性と感性で「音楽を構成する様々な要素」を有機的に統合できれば、独自の美が生まれる。

音楽を含む全人的教育では、問いかけが鍵に

思考力や問題発見・解決力など、見えにくい力を重視する教育プログラムがある。国際バカロレア（IB、本部：ジュネーブ）はその一つだ。全人的教育をめざし、初等教育から高等教育まで主要科目を万遍なく学び、その一環として芸術や音楽も含まれる。

（参考：音楽を重視するIB校・アマデウス音楽学校　http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2014/04/25_17832.html）

現在147カ国3,700以上の学校で導入され、117万人の生徒が学んでいるそうだ。近年は特にアジア各国での普及が進み、日本でも大学入試での IB 活用促進の方針を打ち出した。東大では推薦入試（2016年度より導入予定）で、推薦要件を満たす根拠としてIB の成績証明を認めている学部もある。

国際バカロレアは年齢別に３段階に分類される：PYP（Primary Years Programme）は３歳～12歳、MYP（Middle Years Programme）は11歳～16歳、DP（Diploma Programme）は16歳～19歳。学際的に学んでいくシステムで、例えばPYPでは下記のようなテーマを掲げている。

「私たちは誰なのか」「私たちはどのような時代と場所にいるのか」「私たちはどのように自分を表現するか」「世界はどのような仕組みになっているのか」「この地球を共有するということ」・・・。

この問いかけは統合的かつ普遍的なものであり、どの教養科目においても、深く学ぶ力を引き出してくれる。実際、IB校のカリキュラムは総合的な成績向上にも繋がっているという報告がある。米国のIB修了生対象に実施した調査によると、アイビーリーグ（ハーバード、イェール等、8大学）においてIB　修了生の合格率は当該大学における全体合格率と比べて　3～13%ポイント高く、また米国共通テスト（SAT, ACTなど）においても全米平均スコアより高いそうである。

（参考PDF　http://ww　w.ibo.org/iba/commoncore/documents/GlobalDPDestinationSurveyUS.pdf）

またこのような問いかけは、学ぶ意味や方法を見つめ直すきっかけになる。現在、日本で進められている大学入試改革では（“高大接続改革実行プラン” www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/1354545.htm）、個人個人の多様性に富む学習成果や能力を反映させるべく、新たな大学入学者選抜ルールが構築されている。その一つとして新テストの実施が検討されているが、従来の「教科型」だけでなく、新たに「合教科・科目型」・「総合型」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/attach/1349601.htm）の学力評価方法が導入される。「合教科・科目型」「総合型」では、どの科目にも応用できるような力、すなわち問題解決力や分析力などが評価の対象になる。このような見えにくい力をいかに評価するか、その指標の開発が現在進められている（ルーブリック等）。

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

言葉になる以前の、感じる力

全人的教育は、人間のあらゆる能力を統合的に伸ばしていく考え方である。知識や技能を実社会で生かす時に、専門科目の知識だけではなく、幅広い教養という土壌から多彩な花を咲かせてほしいという願いが込められている。そして地下水脈のようにあらゆる領域をつなぐのが、「人間とは?」という問いかけである。

では、なぜ全人的教育に音楽や芸術が含まれているのか。

音楽や芸術には、言葉になる以前の曖昧で複雑な感情を受けとめ、包み込み、解き放つ力がある。言葉にするには感情を客観視しなければならないが、音楽はただ”共にいる””共に感じる”ことができる。そして、その中で本当に大事なことに気づくことがある。それは小さな心の声かもしれないが、それが実は豊かな社会の原点でもあり、人類にとって最も大事なことであったりする。

それを感じ取る「感性」は、氷山モデルの底にある。つまり、その人自身を支える「根」だ。その根を豊かに伸ばしていくのが、音楽・芸術なのである。

ピティナ・ピアノホームページ　【読み物・連載】海外の音楽教育ライブリポート（菅野恵理子）2015/5 掲載記事
http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/

(c)一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）